

# 光受寺通信

NO.180 R6・6・1 発行  
発行元 光受寺



近年、若いも若きも、男性も女性も、職業に関わらず理解できない事件を起こすことが多いように思う。自分勝手さが、ますます横行し、その結果が傷害事件や殺人にまで至ってしまうことの恐ろしさにこれからの日本が案ぜられてくる。

最近では「カスハラ」という言葉がよく聞かれるが、信じられない言動に身震いすることがしばしばである。昔からいじめや嫌がらせはあったものの、カスハラはどこか異常性を感じてしまう。

経済発展は確かに生活の便利さと豊かさを与えてくれたものの、豊かさの質の変化が、奇妙に変容しているようにも思える。人間関係は希薄化し、心がカラカラと渴き、わずかなことにも苛立ちを覚えてしまっているようだ。

今、私たちは質実ともに豊かな社会や人生はどうあるべきかを真剣に考えなければならぬ時機だと思ふ。日本は先進国だと勝手に思っているものの経済発展と精神文化の向上のバランスがとれていて初めて先進国と言えるのではないだろうか。今の日本にはそれがない。

「昔は何もなかったが、何かがあった」そんな掲示板を目にしたことがあったが、その、「何か」が「何」であるのか、よくよく考えてみるのだが、真に豊かな日本になるための第一歩ではないだろうか。

## 光受寺学習会（歎異抄に学ぶ）

5月18日（土）午後2時より

### 第9条

今回の内容は、『歎異抄』の作者であるといわれている唯円が聖人に質問をし、それに答えるという対話形式となっています。唯円からは二つの疑問、質問がなされました。

その一、私は口にお念仏を申しておりますが、心に躍り上がるような喜びが湧きおこってきません。

その二、また少しでもはやくお浄土へ行きたいという心もおこってきません。  
**いったいこれをどう思ったらよいのでしょうか、と。**

この唯円の質問は、**私たちの思いを代弁しているように思われませんか。**そういう意味では、とても興味深い「9条」でした。

そして、この疑問に対して聖人は、「親鸞も同じ悩みを持っていたというのです」と共感され、「それはいずれも**煩惱の仕業**です」とお答えになられたのです。

親鸞聖人は、29歳の折、法然上人の教化によって、「雑業を棄てて本願に帰す」とされ、その時の喜びをたとえようもない喜びと受け止められました。しかし、同時にまた『愚禿悲嘆述懐和讃』には「**浄土真宗に帰すれども 真実の心はありがたし 虚仮不実のわが身にて 清浄の心もさらになし**」とされ、**煩惱熾盛・罪悪深重のわが身の事実にならずいていらつしやいます。**

たとえ、お念仏をいたたく身にさせていただいても、煩惱は次々と心を占領し臨終の一念に至るまで消えることはないとおっしゃっているのです。これが「凡夫」ということなのです。しかし、**阿弥陀様の本願はそんな私たちだからこそ憐れんで、「必ず救う」とお誓いになってくださっています。**この世で正定聚の位となり往生が約束されれば、間違はなく浄土では仏になれるのです。

【案内】

6月の学習会・・・6月15日（土）2時より 第10条

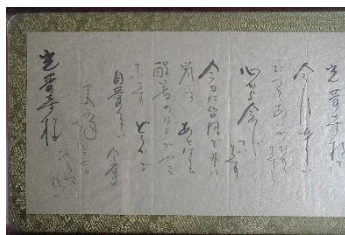


タイサンボクの花

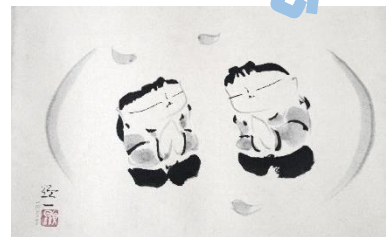
# 佐久間頭一の世界



額装仕立て



平成9年7月・直筆のお手紙をいただきました。(一部分)



軸装仕立て

## 今月の掲示板

念仏は  
自我崩壊の  
音である。

金子大栄

私が救われるということは、私が頑張つて、私が考  
えて、私が信じてという自我に絶望することです。そ  
れによって仏の教えを信じるというより、信じるほか  
にないという道が開かれるのです。  
仏さまのほうから私に願いをかけ、働きかけてくだ  
さっていることを知るのです。

今から30年ほど前かと思うが、佐久間頭一さんご夫  
婦と出会った。あるうどん屋さんで相席をしたことからだ  
つたが、その後ご自宅にもお伺いもし、ご自身から様々な  
お話をお伺いすることができた。それ以来、年に一枚の  
絵が送られてくるようになった。  
お軸にしたり、額縁に入れたりして、大切に保管してい  
る。佐久間さんは大正10年生まれということでも今でも  
お元氣だと思つているが、ご健在であれば、100歳を超  
えられていることになる。昭和42年ごろ鉛筆素描が童  
子の姿となり、各地で「合掌童子」展が開かれたそうだ。  
著書には「合掌童子の世界」など何冊かあるが、その中  
に「無心の世界」という作品がある。描かれているそのほ  
とんどが、合掌童子のすがたである。  
「合掌童子と私」では、「私は純な心が大好きだ。温か  
く、清らかで、けがれのない心が無限に好きだ。そんな心  
を一つの顔に託そうとすると飽かず筆を執るうち、いつ  
しか伏し目の童子の顔になり、合掌する姿が多いので、だ  
れ言つとなく「合掌童子」と名がついた。」と。  
確かにこの絵を見ると、けがれのない童子の純粋な

心の世界の広がりを感じられる。童子の眼は常に一本の線  
で表現されているが、作者の思いのすべてがここに込められ  
ているように思えてくる。  
毎日毎日童子を書き続けられているとお話しくださつて  
いました。我が家に届いた童子たちの一枚には145,01  
0とナンバーが打つてある。今では100万は超えている  
のではないだろうか。  
損か得か、勝つたか負けたかに振り回されて生きている  
人間の世界に、ただ黙つて微笑みを投げかけ続けている童  
子たち。こんな世界に生き続けられている佐久間さんは幸  
せだと思ふ。

## アジサイが咲き始めました。

境内には毎年数十種類のアジサイが咲く。中でもヤマア  
ジサイは咲き始めるのが早い「藍姫」、「七変化」などはも  
うすっかり見ごろを迎えています。

ここでは「小次郎」という淡いブルーでとてもさわやかな  
感じを与えてくれるアジサイを紹介しています。

その他にも多くの種類のアジサイが咲いて  
います。



墨俣町のアジサイ祭りにお出かけの折に  
は、ぜひ光受寺にもお越しください。

### お知らせ

参加自由 お茶タイムもあります。  
お寺サロン 6月20日(木)

一時半〜二時半

『正信偈』には何が書いてあるの?.